

びわこの 考湖学

11

古代律令国家が成立した奈良時代の中ごろ(8世紀半ば)、瀬田川の東岸に、近江国を統治する行政機関、近江国府が置かれました。西岸では天平宝字3(759)年、淳仁天皇の宮である保良宮の造営が始められ、同5(761)年には石山寺の増改築が着工されました。

このように、瀬田川をはさんで瀬田・石山の地には多くの人々が集い、さまざまな物資が集められて、大いに賑わったとみられます。石山寺や奈良の東大寺を造営するため、の用材も、瀬田川の水運で運ばれていました。都を彷彿させるほどの賑わいだったので、はないでしょうか。

『正倉院文書』には、瀬田川の水運の詳しい記録が残されています。その中で、天平宝字6(762)年の記述を見てみましょう。

3月17日、勢多津から泉津

(木津川にあった湊)まで、柱20本と板材600本を運賃したとあります。同じ日には、造石山院所が勢多庄に、藁の輸送を馬による陸運から「勢多庄の船津」からの水運に切り替えるよう命じています。

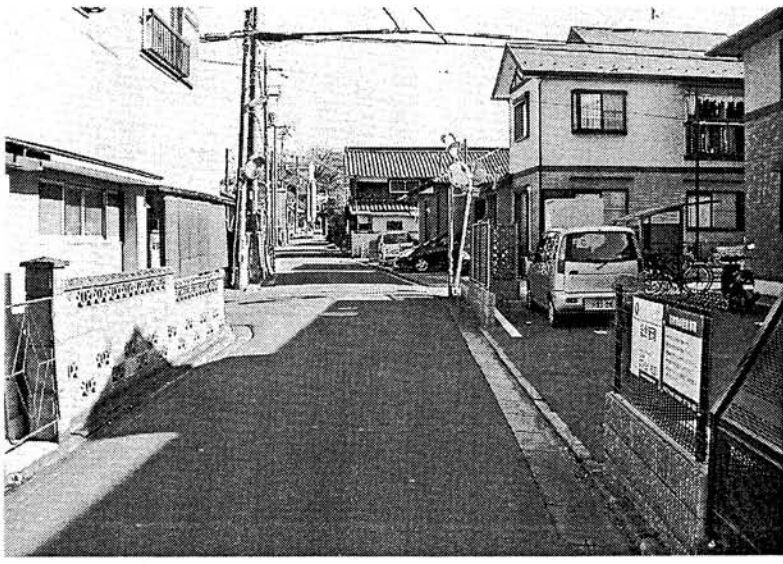
勢多津

これらの記述から、古代勢多橋の近くに、勢多津と呼ばれた湊があったことが分かります。さらに、物資が集まる勢多庄が、勢多津と一体であったこともうかがえます。

国府に運び込まれる物資のうち、水運によるものは勢多津で水揚げされ、山城や大和(平城京)に運ばれる物資もいったん勢多津に集積されていたのです。近辺には市もあったよう

で、民間レベルでも、近江国の交易の中心だったのでしよう。

造石山院所は、「此市」で買えなかった漆と墨繩を都で購入してもらうよう7月2日付で依頼しています。12月19日には盗難騒ぎがありました。盗賊に入られた造石山院所は、勢多庄に盗難品を取り戻すように命じるとともに、国府と「市司」の協力を求めています。このように、この市は勢多庄や近江国府と密接にかかわり、市司という役人が管理する、政治的に開かれた公的な市だったので、その位置ですが、古代勢多橋の東詰に「市ノ辺」という小字が残ることから、この付近だと推定されます。勢多津も、このあたりの岸辺に開かれていたとみてよいでしょう。



かつての勢多橋から東へのびる道。古代官道を踏襲しているとみられる
—大津市瀬田2丁目

物資集積、近江国交易の中心

(滋賀県文化財保護協会 平井美典)